

目的 接着縫製における接合部分の実用性を検討する目的で、hemの始末をとり上げ、洗たく耐性およびドレープ性について、基礎的なモデル実験を行なった。

方法 市販の晒天竺を用いて、シーツ、カバー類、ナフキン等のモデルとして、でき上り $40\text{cm} \times 40\text{cm}$ の大きさに、周囲を三つ折りし、接着4種および普通糸のミシン縫で始末した試料を作成し、電気洗たく機で30 min.連続洗浄、3 min.のすすぎ2回を1サイクルとして、4回くり返し、接着部分の剝離、収縮の状態、剛軟度の変化などについて観察した。ドレープ性については、スカートのhemの始末のモデルとして、幅15.7 cm、長さ30 cmの試料を、市販のスカート用布地の中から数種えらんで作成し、MIT方式による垂下状態を比較した。

結果 家庭用アイロンの圧着では、洗たくにより、部分的に剝離することがあっても、仕上げの際のアイロンかけにより回復し、120 min.洗浄後には、全く剝離は見られなくなった。収縮率については、接着の場合も、普通糸の縫製の場合も、大差はないが、剛軟度については、両者の間に高度に有意な差が見られ、洗浄後においても、接着の場合の方が、大きい値を示していた。ドレープ性は、hemの始末のための二重部分を持たないものが最もよく、その幅によっても異ったドレープ性を示すが、布の種類により、その傾向は一律ではない。従来の始末方法に比して、接着テープや接着糸を用いたものが、特にドレープ性が劣るということは認められなかった。